

評価基準と評価シートによる口頭発表の評価

—JF 日本語教育スタンダードを利用して—

関崎友愛・古川嘉子・三原龍志

〔キーワード〕 評価基準、他者評価、自己評価、JF 日本語教育スタンダード

〔要 旨〕

国際交流基金日本語国際センターが実施している海外日本語教師短期研修における「総合日本語」では、2009年から2010年の3期の短期研修において、口頭発表を評価タスクとした授業を行い、JF 日本語教育スタンダードを利用した評価基準と評価シートによる評価を行った。本稿ではその評価デザインについて3期の実践と成果をまとめた。評価デザインの留意点として、研修参加者の日本語運用力に配慮した評価活動を行うこと、口頭パフォーマンス全体の達成とそれを支える観点の両方に注目させる工夫をすること、評価時に客観的指標としての評価基準を参照すること、評価タスクの後にパフォーマンスについての十分な振り返りのディスカッションを行うことなどが示唆された。

1. はじめに

国際交流基金日本語国際センター（以下「NC」）は、2ヶ月弱の海外日本語教師短期研修を年3回（春期・夏期・冬期）実施している。各回の研修参加者は30人～50人程度で、参加者の国籍は期によって10～30カ国と多様である。また、期によって対象とする教育機関を限定しており、春期は初中等教育機関、冬期は大学等の高等教育機関、民間等の一般日本語教育機関、そして夏期は全ての教育機関となっている。海外日本語教師短期研修では、目標の一つに研修参加者⁽¹⁾の日本語運用力の向上を掲げ、「総合日本語」という科目を設けている。「総合日本語」は、話題ベースのタスクシラバスによる4技能統合型の授業であるが、目標達成の評価が体系的に行われていないという課題があった。そこで、2009年度冬期短期研修（以下「09冬短」）、2010年度春期短期研修（以下「10春短」）、2010年度夏期短期研修（以下「10夏短」）において、JF 日本語教育スタンダード（以下「JF スタンダード」）に基づいた評価基準を利用し、目標・学習内容・評価に一貫性を持たせたコースデザインを行った。その際、授業の中に研修参加者が自らの日本語によるパフォーマンスを客観的に捉え、その後の自律的な学習につなげられるように、評価基準に基づく評価シートを利用した自己評価・他者評価を取り入れた。

本稿では、09冬短、10春短、10夏短の「総合日本語」において主な評価タスクとした口頭発表の評価デザインの方法を記し、そこでの評価基準と評価シートの作成および運用の過程と結

果を報告し、パフォーマンス評価のあり方について考察する。

2. 評価基準を利用した自己評価と他者評価

短期研修だけでなく6ヶ月の長期研修などNCが実施している海外日本語教師研修は、現職教師を対象とし、帰国後に現場で自己学習できる力を伸ばすことを重要と考え、それを研修目標に明記したり、研修の中にそれを意識した内容や活動を盛り込んでいる。近年、日本語学習者の自己学習能力を育てる上で自己評価の重要性を挙げる研究が見られる(小山1996、岡部2001、青木2001など)。ここで述べる09冬短、10春短、10夏短の3期の短期研修では、いずれも自己評価を主体とするポートフォリオ評価を導入しており、「総合日本語」における口頭発表評価の結果はこのポートフォリオに記録・保管している。田中(2008)が、単なる資料のファイリングとポートフォリオ評価との違いを評価基準の設定の有無にある(田中2008:164)と指摘しているように、短期研修においては、ポートフォリオを評価の有効なツールとして活用するため、評価の観点と到達度を取り入れた評価基準(ループリック)を作成して、講師・研修参加者間で共有している。田中(2008)で学習者が「自分は前よりもよくわかった」とか「自分はこれではできないが、これならできる」と評価できるには、またその評価が極端な主観性を免れるためには、教師の側からのねらいに即した評価を提示し、「外的な評価」と「内的な評価」の双方向からなる関係性を創り出すことが大切である(田中2008:129)としている。評価基準は自己評価、すなわち「内的な評価」と教師など他者の評価、すなわち「外的な評価」をつなぐ要の役割を果たす。「外的な評価」は、教師からの評価だけでなく、共に日本語を学ぶ学習者同士の評価も含まれる。村田(2004)、金(2008)の研究は、他の学習者=「ピア(peer)」との対話により自己のパフォーマンスを内省することに意義があるとしていることから、自己のパフォーマンスを客観的に見るためには他者評価は重要であることがわかる。そこで、自己評価だけではなく他者評価も実施し、発表者・講師・他の研修参加者による多角的な評価を行った。

以上の3者による評価をつなぐものとして、JFスタンダードのCan-doを利用して、評価基準を作成した。JFスタンダードは、国際交流基金が作成した「日本語の教え方、学び方、学習成果の評価のし方を考えるためのツール」(参照:JF日本語教育スタンダード <http://jfstandard.jp>)である。JFスタンダードでは、言語によるコミュニケーションを、言語能力と言語活動の関係でとらえている。その考え方にに基づき、日本語の熟達度を「～できる」という形の記述(Can-do)で示し、Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment (CEFR)に準拠したA1・A2・B1・B2・C1・C2の6レベルを示している。CEFRでは、A2・B1・B2をそれぞれさらにA2.1・A2.2・B1.1・B1.2・B2.1・B2.2の2段階ずつに分けてCan-doを提供している。実際の言語使用を踏まえ、実証を経て構築さ

れた CEFR を土台とした JF スタンドードのような枠組みを参照することで、講師が教授対象である研修参加者のレベルや能力をより客観的に把握できる。そして、幅のある熟達度の様相を具体的に研修参加者に示し、自己評価・他者評価において形成的な評価の支援ができるものとする。

口頭発表というパフォーマンスを評価する場合、その場での評価、録音や録画したものを再生して行う評価などの形が考えられるが、口頭発表の特性を考えると、パフォーマンスと評価基準をじっくり照らし合わせながら評価が行える作文などと比べて、評価シートを評価行動の中で利用しやすいように工夫する必要がある。09冬短、10春短、10夏短では、評価基準がうまく評価に反映されるよう、研修参加者の評価行動を考慮した評価シートのデザインを行い、その改善を図った。次節では、以上の評価のあり方を実現するための、具体的な評価のデザインの過程を報告する。

3. 総合日本語におけるコースデザインと評価デザイン

NC の短期研修では、過去の研修参加者のレベルやプレースメントテスト⁽²⁾の結果によって、相対的に日本語運用力の低い A コース（1・2クラス）と高い B コース（3・4クラス）に分け、レベルに応じた研修を行っている。「総合日本語」は、研修参加者の日本語運用力の向上を目的とした、タスクシラバスによるトピックベースの4技能統合型の授業である。A コースでは約53時間（約20回）、B コースでは約39時間（約13回）の授業を行っている⁽³⁾。A コースでは、約20回のうち、2回または3回でひとつのトピックを扱い、計8つのトピックとした。09冬短から10夏短の3期の各クラスの日本語レベルは表1の通りである。短期研修では、JF スタンドードの提供する Can-do⁽⁴⁾を利用し、「総合日本語」のコースデザインを行っているが、以下、09冬短1クラスでの作業を例に、コースデザインと評価デザインについて述べる。

クラス	09冬短			10春短			10夏短		
	人数	開始時レベル	目標レベル	人数	開始時レベル	目標レベル	人数	開始時レベル	目標レベル
1	11名	A2.1	A2.2~B1.1	10名	A2.1	A2.2	12名	A2.1	A2.2~B1.1
2	9名	A2.2~B1.2	B1~B2	10名	A2.1	A2.2	11名	A2.2	B1.1~B1.2
3	評価を実施せず			9名	A2.2~B1.2	B1~B2	14名	B1.1~B1.2	B1.2~B2.1
4							14名	B1.1~B1.2	B1.2~B2.1

表1：09冬短・10春短・10夏短での口頭発表評価実施クラス概要

3.1 コースデザイン

ここでは09冬短1クラスを例にとり、コースデザインの流れ（図1）を概観する。

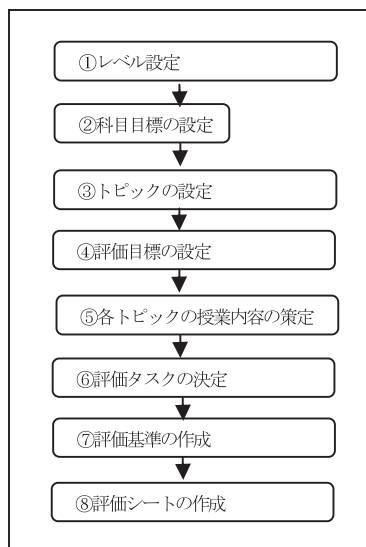
①レベル設定：09冬短1クラスの研修開始時のレベルは、前述のクラス分けの方法により A2.1

(一部 A1) レベルであった。そして、研修終了時に期待される目標到達レベルを A2.2~B1.1 に設定した。

②科目目標の設定：次に、研修における1クラスの「総合日本語」の目標として、「社会生活に必要な基本的な聞く、話す、読む、書くコミュニケーションの力を身につける」、「家族、旅行、教育、仕事、趣味などの身近な話題や、一部のニュースの話題などについて、まとまりのある話ができる」「日本の文化と自分自身の文化との間の、習慣などの違いを考えて、行動することができる」の3つを設定した。

③トピックの設定：これら科目目標に基づき、見学、ホームステイなどの他の行事や活動の配置を考え、授業で扱うトピックを「自分・家族」「旅行・交通」「学校・教育」「仕事・労働」「趣味・娯楽」「交際」「自然・環境」「異文化」とした(表2参照)。

図1：コースデザインの流れ



3.2 評価デザイン

次に、評価デザインの方法について述べる。

④評価目標の設定：2ヶ月の研修期間では、4技能のうち研修参加者が最も伸びを実感しやすいことから、口頭能力の向上を目指して「発表原稿を作らずに一人で3~5分程度のまとまった話ができる」ことを評価目標として設定した。

⑤各トピックの授業内容の策定：前述の8つのトピックそれぞれについて、科目目標に沿って、表2のような4技能統合型の授業活動を考えた。

⑥評価タスクの決定：研修参加者がコースを通して複数回の口頭発表を経験できるように、評価タスクを配置した(表2の★を参照)。

⑦評価基準の作成：⑥と並行し、既存の教材や口頭発表能力に関する研究を参照し、JFスタンダードの産出(話す)およびコミュニケーション言語能力などのカテゴリーのCan-doの中からタスクやレベルの特徴の記述部分を抽出し、研修参加者にも理解しやすいようにまとめ直し、表3のような評価の観点と観点ごとの達成度を記述した評価基準を作成した。

⑧評価シートの作成：この評価基準をもとに、各レベルのイメージを担当講師間で共有し、各記述において目標を達成するためのポイントとなる項目を抜き出していき、図2・3のような評価シートを作成した。評価シートは講師による評価だけでなく、他者評価および自己評価の際にも用いるため、研修参加者の日本語運用力を考慮し、使用時の使いやすさに留意して作成した。

評価基準と評価シートによる口頭発表の評価

日程	トピック	活動の内容
2/2火AM 5金AM	自分・家族	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介をする ・クラスメートの家族や仕事について質問する ・クラスメートの紹介文を書く
8月AM 9火PM	旅行・交通	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の交通機関と利用方法について知る ★ペアでお勧めの場所とその行き方をクラスメートに紹介する
10水AM 15月AM	学校・教育	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の学校制度や学校生活について知る ・高校生へのインタビューの準備をする ★高校訪問の報告をする
16火AM 17水AM 18木PM	仕事・労働	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人に仕事に対する考え方についてインタビューをする ★インタビューの結果をまとめて報告の発表をする
22月AM 23火PM	趣味・娯楽	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の趣味や好きなレジャーに友だちを誘ったり誘われたりする練習をする ・イベント参加を呼びかけるポスターを作る ・ポスターを使って、イベントの参加を呼びかける
24水AM 25木PM 3/2火PM	交際	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の家庭や訪問の際のマナーについて知る ・ホームステイの家族と挨拶をしたり、おしゃべりをするための会話を練習する
3/3水AM 4木PM 8月AM	自然・環境	<ul style="list-style-type: none"> ・環境問題について知る ・環境問題の解決方法について話し合う ★環境問題のアンケートをして、結果を発表する
10水AM 11木PM 15月AM	異文化	<ul style="list-style-type: none"> ・日本で体験を振り返り、クラスメートと意見を交換する ★日本での異文化体験に関するスピーチを行い、クラスメートからの質問に答える

表2：09冬短1クラス「活動の内容」

4. 評価シートの作成と評価の実際

表1に示す09冬短から10夏短までの口頭評価を実施したクラスの授業では、評価活動を以下の要領で行った。

3で述べたとおり、各クラスの担当講師が研修参加者の日本語運用力を考慮して発表パフォーマンスを評価するための評価基準（表3：09冬短1クラスの例）を作成した。各クラスごとに作成した評価基準は、発表パフォーマンスの評価の根拠となるものであるが、記述が多く、記述内容も抽象的であるため、評価基準をそのまま利用して口頭発表の評価を行うことは難しい。そこで、研修参加者の運用力や評価行動を考慮し、評価基準に沿って評価時に使用する他者評価用と自己評価用の2種類の評価シートを作成した（評価シートについては4.1から4.3を参照）。そして、各クラスで研修参加者がこの評価手法を理解し実践できるように授業の中で評価のリハーサルを行った。評価を実際に行うに際しては、まず発表直後にピアによる他者評価を深化させるためにクラスで発表に関するディスカッションを行い、その後発表者以外の全員がそれぞれ他者評価シートに記入して発表者に手渡した。授業後、発表者は他者評価シートを参考にICレコーダーで録音した自分の発表音声ファイルを聞き、自己評価シートに記入する作業を通して自己評価を行った。他日、自己評価シートと他者評価シートを担当講師に提出

達成度 評価項目	目標以上を達成 (B1.1)	目標を達成 (A2.2)	もう少しで目標に達成 (A1)
内容	<ul style="list-style-type: none"> 旅行・交通、教育、仕事、環境、文化について順序だてて話し、それに対する自分の考えを述べることができる。 意見、計画、行動について短い理由を言ったり、説明することができる。 自分の感情や反応を述べながら、経験をくわしく説明できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画・準備・習慣、毎日の仕事、昔やったことや自分の経験を短く述べることができる。 意見、計画、行動に対して、理由を挙げて、短く述べることができる。 自分の感情や反応を簡単なことばで短く述べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の仕事について部分的に、非常に短く述べるができる。
構成	<ul style="list-style-type: none"> より広い接続表現を使って、経験したことを順序だてて話すことができる。 「序論 (はじめ)、本論、終わり」のような段落構成 (話の構造) を使って、ポイントを詳しく話すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「そして、～で、～から/ので、でも」などの接続表現を使って、簡単な文をつなげ、ポイントを述べることもできる。 「序論 (はじめ)、本論、終わり」のような段落構成 (話の構造) を使って話すことができる。 ※「」内は授業で扱う。 	<ul style="list-style-type: none"> ことばをならべて述べることができる。 文と文をつなげて述べることができる。
聞き手に対する配慮	<ul style="list-style-type: none"> 話の要点と流れがはつきりしていて、聞き手にとってわかりやすいスピーチができる。 スピードが速い質問でも、聞き返したりして、だいたいの質問に答えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 勉強した語彙や表現、練習した言い回しを使いながら、スピーチの場で何とか言いたいことを伝えられる。 質問を聞き取れないときは、「もう一度言っていただけですか」など、聞き返したりしてゆっくり繰り返してもらい、聞き手の簡単な質問に答えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 短い挨拶のスピーチなど短いメッセージを聞き手にわかるように伝えられる。
語彙・文法	<ul style="list-style-type: none"> 旅行・交通、教育、仕事、環境、文化について、自分に関わる語彙や表現、文型を使って、自分の述べたいことがだいたい述べられる。 (例：比較/は、も、～より、理由/なぜかという、というの、は、引用/よう、そう) 	<ul style="list-style-type: none"> 行ったことのある場所や経験したことについて、勉強した語彙や表現、文型を使って短く説明できる。 (例えば、場所、交通機関、形容詞、状況説明の語彙/職業や価値観に関する表現/比較、理由、引用の文型など) 	<ul style="list-style-type: none"> 日常的によく使ういくつかのことばや表現、文法を使うことができる。
スピーチ・発表の特徴	<ul style="list-style-type: none"> 自分の関連する分野に関する話題について、練習すれば、アクセントやイントネーションなどで少しわかりにくいくところもあるが、聞き手にとって理解しやすいスピーチができる。 	<ul style="list-style-type: none"> スピード、ポーズ、声の大きさ、アイコンタクトなどに気をつけながら、話すことができる。 スピーチのキーワードを聞き取りやすく発音できる。 ※これらの項目が聞き手の理解に関わっていることを授業で扱う 	<ul style="list-style-type: none"> 練習済みのことばや表現を言うことができる。
方略	<ul style="list-style-type: none"> 【計画】スピーチの要点を分かりやすく伝えるための方法を考えることができる。(新しい言葉や表現を、相手の反応を見ながら、試すことができる。) 【補償】ことばを思い出せなくても、似ている意味のことばで説明して言い表すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 【計画】スピーチの前に、自分の知っている語彙や表現を思い出して、「写真、インターネットの質問シート、アイディアマップ」を使って話す内容を整理することができる。 【補償】言いたいことが思い出せなくても、ジェスチャーや表情などを使って、伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 方略を使うことができない

表 3 : 09冬短 1 クラス 「口頭発表の評価基準」

し、担当講師は研修参加者の自己評価に対してコメントを記入し発表者に返却した。ただし、評価シートのみを示したクラス、コースの最初に評価基準を示し評価の都度参考にさせたクラスなど、研修参加者との評価基準の共有のあり方はクラスによって様々であった。

以下に、09冬短、10春短、10夏短における評価シートについて概観し、それぞれの特徴を述べる。

4.1 09冬短の実践と成果

ここでは、09冬短2クラスの評価シートを例にあげる。評価基準（表3参照）の内容を、研修参加者と共有するために評価基準の中の観点ごとの目標記述のポイントを示し、チェックできるようにした評価シート（図2・3）のみを授業で利用し、評価時には評価基準を提示しなかった。他者評価のシート（図2）では、まず発表全体に注目するよう、全体の印象をチェックするスケールと、内容に対するコメント記述欄を設け、その下に評価基準の観点ごとのポイントをチェックできるようにした。自己評価では、全体の印象の項目の下に、評価基準のポイント別のチェック欄、発表のよかった点、むずかしかった点、改善したい点の自由記述欄を設けた。

教室では、一人の口頭発表ごとに図2の評価シートでクラスの他の研修参加者による他者評価を行い、発表者に渡し、発表者は他者からの評価シートを確認した上で自己評価シート（図3）により自己評価を行った。

これらの評価シートによる評価の成果としては、評価シートには観点のポイントが挙げられており、研修参加者には「何を意識して話せばよいか」という焦点がはっきりと理解された点、またチェック形式にしたため、評価活動が容易であった点が利点として挙げられる。また、後半部に「よかった点」および「わかりにくかった点、改善したほうがいい点」として記述欄を設けたことで、「スピードはもう少しゆっくりしていたら良いと思います」など、提示された観点以外の点についての記述も見受けられた。

しかしながら、評価がパフォーマンスの印象と言語面の観点に限定されがちであったこと、また、それぞれの項目ができたか、できなかったかという二者択一のチェックの仕方であったため、発表パフォーマンス全体の目標達成の程度が判断しにくかったという点が課題として残った。

図2：09冬短2クラス「他者評価シート」

09冬短2クラス 発表評価シート

2月18日
発表のテーマ: []
発表者: [] さん

1) 全体の評価

発表の内容で、どのような点がよかったですか
おもしろかったですか
「保安191」びとして、24時間働く

もっと知りたい、質問したいことはどんなことですか
はい、いいいにかるために、どうですか? とは、何? :

2) 特にいいと思ったことは何ですか?
下の口に✓を書きましよう(いくつでもOK)

① 内容 話す内容を順序だてて話した。
 自分の考えを理由も答えて述べた。
② 構成 経緯をわかりやすく説明した。
 様々な接続表現を使った。
 段階構成があった。
③ 言い交差 発言したいポイントを詳しく言った。
 発表のテーマに合った言葉や交差項目を使った。
④ その他 質疑、イントネーション。
 質疑への答え方。

図3：09冬短2クラス「自己評価シート」

09冬短2クラス 発表評価シート

月 日
発表のテーマ: []
発表者: []

1) 全体の評価

自分でよくできたと思ったことはどれですか。
下の口に✓を書きましよう(いくつでもOK)

① 内容 話す内容を順序だてて話した。
 自分の考えを理由も答えて述べた。
 経緯をわかりやすく説明した。
② 構成 様々な接続表現を使った。
 段階構成があった。
 発言したいポイントを詳しく言った。
③ 言い交差 発表のテーマに合った言葉や交差項目を使った。
④ その他 質疑、イントネーション。
 質疑への答え方。

発表の際に、うまくいった点はどんなところですか。
発表日 発表後 順序がよかったと思(1/2)

どんな点がむずかしかったですか。
情報が多めに、それをまとめる6分以内の発表を出すのはむずかしかったです。

今後、どんな点を改善したいと思いますか。
自分の意見をも自分の国との比較を念めたいと思(1/2)

4.2 10春短の実践と結果

10春短1クラスの評価デザインの特徴として以下の2点が挙げられる。まず、4.1の09冬短の課題を踏まえ、10春短ではパフォーマンス全体の達成度を見るために、評価基準の項目にJFスタンダードの「コミュニケーション言語活動」のカテゴリーを設けたことである(表4を参照)。このことによって目標達成を、パフォーマンス全体と言語面などの観点ごとの両方で評価することが可能となった。また目標となるレベルだけでなく、その上下のレベルも視野に入れて評価できるようにするために評価基準(表4)を参照しながら評価する評価シート(図4・5)を作成した。ここでは、毎回の評価の際に評価基準を参照させながら評価を行った。1クラスでは評価基準の日本語の理解が容易ではないと判断されたために評価基準に研修参加者の母語もし

図4：10春短1クラス「他者評価シート」

評価シート

月 日
テーマ「 [] 」

([]) さんへ
1. 全体の評価 (○をつけてください)

よくなかった あまりよくなかった ちょうどよかった よかった とてもよかった

図2. 観点別の評価 (○をつけてください)

観点	レベル	もう少し	できた	ずばらしい
コミュニケーション言語活動	構文(ディスコース能力)			
	語彙			
	文法			
コミュニケーション言語能力	表現			
	発音			
	流暢さ			

コメント

[] より

	1 もう少し	2 できた	3 すばらしい
I. 【コミュニケーション言語活動】 communicative language activities 話す speaking	人や場所について簡単なことを使って話すことができる。 Can talk in simple terms about people and places.	毎日の生活や仕事、好ききらいについて随分見ずみ、「始め、内容、終わり」の構成を考えながら2〜3分の間まとまった話ができる。 Can talk coherently with the basic structure beginnings, middle, and end in mind for 2-3 minutes without looking at the script about everyday life, work, and likes and dislikes.	自分の好きな話題について、3分〜5分程度のまとまった話ができる。序論、本論、結論の構成で聞き手がよくわかるような簡単なプレゼンテーションができる。 Can talk coherently for about 3-5 minutes about the topic of choice. Can deliver a simple presentation that is composed of an introduction, a body, and a conclusion and is easy to understand.
構成 (ディスコース能力) discourse competence	「そして」や「それから」を使って、簡単な言葉をつなぐことができる。 Can connect simple words using "and" and "then."	「そして」「しかし」「だから」などのような接続表現を使って話すことができる。 Can talk using simple connective expressions such as "and" "but" "because."	よく使われる接続表現を使って、何かにについて話したり、説明したりすることができる。 Can talk about or explain something using commonly used connective expressions.
語彙 vocabulary	あいさつや自己紹介などの場面で使う言葉や表現を知っている。 Knows words or expression to use when greeting someone or introducing oneself.	基本的なコミュニケーションができるための語彙を使うことができる。 Can use vocabulary necessary for basic communication.	よく知っている場面や話題について、十分な話し合いをするための語彙を知っていて、使うことができる。 Knows and can use vocabulary necessary to have a thorough discussion about topics and situations one is familiar with.
文法 grammar	数は少ないが、自分が習った簡単な文法や文型を使うことができる。 Can use simple grammar and sentence patterns one has learned, though there may not be many of them.	決まった文法のまじりがあるが、話したいことはわかる。 Can make the other person understand what one wants to say, though he/she makes certain grammatical mistakes.	どんな話をするかわかっていて、よく使われる文法や文型をだいたい正確に使うことができる。 Can use commonly used grammar and sentence patterns fairly accurately when one knows what he/she will be talking about.
表現 expressions	自分が習った表現を組み合わせてみることができる。 Can try and combine expressions one has learned.	知っている表現を組み合わせを変えて、使える表現を解することができる。 Can change the combination of expressions one already knows and increase the number of expressions that he/she can use.	いろいろなことを話すために、簡単な日本語の表現を場面や状況に合わせて使うことができる。 Can adapt simple Japanese expressions to the topic or situation and use them to talk about various things.
II. 【コミュニケーション言語能力】 communicative language competences	自分が習った言葉や表現なら友達や知り合いが聞いて理解できるぐらいには、発音できる。 Can pronounce words and expressions one has learned so that friends and acquaintances can understand.	ときどき相手に「もういちど言ってください」などと頼まれるが、相手がだいたいわかるぐらいには発音できる。 Can pronounce things so that the other person can generally understand, though one is asked to repeat occasionally.	発音をまがちがえることはあるが、相手がよくわかるぐらいに発音できる。 Can pronounce words so that the other person can understand, though there may be mistakes in the pronunciation.
社会言語 sociolinguistic competences	丁寧で簡単な表現で、会った時や別れるときの挨拶、お断りしたり、お礼を言ったり謝ったりすることができる。 Can use polite and simple expressions to greet someone, say good bye, ask for something, thank someone or apologize.	丁寧な言葉遣いで、毎日の挨拶や呼びかけをすることができる。また、謝ったり、褒めたり、謝ったりすることができる。 Can greet or call out to people in everyday situations using polite language. Can also invite people, make proposals, or apologize.	日本と自分の国の社会や習慣の違いがわかって、問題が起きないように日本語を使うことができる。 Can understand the differences between one's country's society and customs and those of Japan's, and use Japanese in a way that causes no problems.
流暢さ fluency	時間がかかるが、準備してあれば短い話をする事ができる。 Can talk for a short period of time if one is prepared, though it may take some time.	話しているとき、ことが出てこなくなったり、もう一度直すことが多いが、よく知っていることなら言いたいことを伝えることができる。そして短い会話をすることができる。 If it is about something one is familiar with, he/she can convey what he/she wants to say and have a short conversation, though he/she may hesitate or restate something while talking.	正確に話そうと話しながら直したりするが、長い話が話せる。 Can talk for a longer period of time, though one may restate things to say things accurately.

表 4 : 10春短 1 クラス 「評価基準」

評価基準と評価シートによる口頭発表の評価

4.3 10夏短の実践と結果

10春短では、評価基準を手元に置いて記述を確認しながら評価シートにチェックを入れなければならず、評価は容易ではなかったため、10夏短1クラスでは、評価の際の負担を減らすため、言語能力の観点のうち、優先度の高い項目4つに絞り、その他の観点はコミュニケーション言語活動に含めて評価することとした。しかし、目標レベルとその上下の3レベルの記述を参照しつつ発表直後に評価シートにチェックを入れるのは依然として容易ではなかった。また、スケールが「もうすこし」「できた」「すばらしい」という主観的な表現を採ったため、文言に左右されて客観的な評価になりにくいという点が課題であった。そこで観点ごとの

図6：10夏短1クラス「他者評価シート（後半）」

評価シート

月 日 テーマ「 _____ 」

(_____) さんへ

1. 全体の評価 (○をつけてください)

よくなかった あまりよくなかった よかった とてもよかった

2. 観点別の評価 (○をつけてください)

コミュニケーション言語活動「話す」	毎日の生活や仕事、好き嫌いについて原稿を見ずに、「始め、内容、終わり」の構成を考えながら2〜3分のまとまった話ができる。	1	2	3	4	
コミュニケーション言語能力	構成 (ディスコース能力)	「そして」「しかし」「だから」などのような接続表現を使って話すことができる。	1	2	3	4
	語彙	基本的なコミュニケーションができるための語彙を使うことができる。	1	2	3	4
	文法	決まった文法のまちがいがあるが、話したいことは相手にわかってもらえる。	1	2	3	4
	発音	ときどき相手に「もういちど言ってください」などと頼まれるが、相手がだいたいわかるくらいには発音できる。	1	2	3	4
コメント						

(_____) より

目標レベルのみに絞って記述を記載し、4段階の数値でパフォーマンスの出来を評価するようにした (図6・7参照)。そして表4に示した評価基準は研修開始時と終了時に確認するのみ

図7：10夏短1クラス「自己評価シート」

自己評価シート

月 日 テーマ「 _____ 」 1クラス 氏名(_____)

1. 全体の評価 (○をつけてください)

よくなかった あまりよくなかった よかった とてもよかった

2. 観点別の評価 (○をつけてください)

コミュニケーション言語活動「話す」	毎日の生活や仕事、好き嫌いについて原稿を見ずに、「始め、内容、終わり」の構成を考えながら2〜3分のまとまった話ができる。	1	2	3	4	
コミュニケーション言語能力	構成 (ディスコース能力)	「そして」「しかし」「だから」などのような接続表現を使って話すことができる。	1	2	3	4
	語彙	基本的なコミュニケーションができるための語彙を使うことができる。	1	2	3	4
	文法	決まった文法のまちがいがあるが、話したいことは相手にわかってもらえる。	1	2	3	4
	発音	ときどき相手に「もういちど言ってください」などと頼まれるが、相手がだいたいわかるくらいには発音できる。	1	2	3	4
講師(_____)からのコメント						

とし、研修参加者の自己学習の参考とさせた。

以上、09冬短から10夏短までの変遷を、主に1クラスを例にとって評価シートの改訂を中心に見てきた。以上の改訂は、大きく以下の4点にまとめることができる。

- (1) パフォーマンス全体の達成を評価する
- (2) 評価の際、評価基準を参照する
- (3) 評価の観点をできるだけ絞る
- (4) 目標達成の度合いの評価方法を工夫する

これらの改訂は、その時々研修参加者の特性に合わせ、評価の基準をより意識化して評価できるようにするために行われてきた。したがって、必ずしも後の方の評価シートがよいものであるとは言えない。重要なことは、研修参加者やコース目標に合わせて評価シートを工夫していくということであろう。

5. 考察

前節では、09冬短・10春短・10夏短で利用した評価基準および評価シートの作成と運用を概観した。ここでは、実際の授業での評価基準と評価シートの使用を通じて観察された成果を振り返り、このような評価を実施する際の留意点、課題を述べる。これらは、パフォーマンス評価を行う際に評価基準・評価シートを現場で作成・運用していく上で参考になるものと考えられる。

まず、成果としては、いずれの回においても研修終了時に行っているアンケートにおいて、「発表を行うことに自信が持てるようになった」「準備から発表までの作業に慣れた」「このような評価の経験をしたことがなかったので役立った」という声が、口頭発表評価を取り入れたどのクラスにおいても複数あった。自信が持てるようになったとする研修参加者は、複数回の自己評価・他者評価を行うことでどのような点ができていて、どのような点に注意していけばよいかを自覚することにより、発表について自信が持てるようになったことが考えられ、これは評価基準に基づく評価を実施したことの成果と言えるだろう。さらに、アンケートや自己評価シートに「まだ自分の発表には課題がある」などと自分のパフォーマンスの課題についての言及があったり、具体的な改善ポイントをあげる研修参加者がいた。たとえば、評価基準を参考にして自分のパフォーマンスを振り返る次のようなコメントが自己評価シートに見られた。

「自分の発表は構成があって自分の感想を述べていた。しかしいちばん言いたいポイントをくわしく言うことができなかった。」

また他者からの評価を受けることで自分のパフォーマンスの課題を見出した次のコメントもあった。

「最初は速く話すことが上手な話し方だと思っていたが、クラスメートの評価シートを読

んでゆっくり話すことがわかりやすい話し方だということがわかった。」

このようなコメントから、評価基準を参照し他者評価を複数回繰り返す中でそれぞれの課題を自覚し、自ら次のパフォーマンスでの目標設定をしているようすが見て取れる。また、評価基準を参照することによって、自分の発表能力を高めていく上での具体的なイメージができ、それに照らして自己評価を行っていることがうかがえ、形成的な評価につながっていることがわかる。また、自己評価や他者評価のシートへの記述やディスカッションでの発言の中に文法や語彙などについての指摘ではない、発表全体の構成や態度などに関する様々な指摘が見られた。これは、JFスタンダードのCan-doを評価基準の記述を考える根拠としたことで、構成や聞き手への配慮、社会言語的側面や方略など、評価基準がない場合には目が行きにくい観点を意識でき、評価の観点が広がったり、さらに具体的なポイントとして認識でき、それらをチェックできたためと考えられる。

「総合日本語」の口頭発表評価で目指しているのは、研修参加者自身が客観的に自分のパフォーマンスを振り返ることであり、他者評価・自己評価のシートは、研修参加者がパフォーマンスを客観的に振り返れるよう支援するツールとなるべきだと考えることから、4で述べたように評価シートの改訂を行ってきた。このような改訂作業過程で明らかになった評価基準・評価シートの作成・運用の上で留意すべき点は、以下の4点である。

(1) 研修参加者の評価活動のために必要な日本語への配慮

日本語教師であるとはいえ、研修参加者の日本語運用力は様々であるため、クラスによっては、日常生活におけるコミュニケーション活動において十分に思ったことを話したり書いたりすることが困難なレベルである場合もある。したがって、評価基準・評価シートのデザインの際に、研修参加者の日本語運用力を十分考慮し、記述を簡易化する、多言語化を図る、わかりやすいレイアウトにする、さらには利用の仕方に工夫をすることなどが重要である。

(2) パフォーマンス全体とそれを支える観点の両方に注目させる工夫

評価基準を利用したパフォーマンス評価は、パフォーマンス全体を評価するだけでなく、観点別のさまざまな側面からの評価が可能である。そこで、評価のあり方を指導する際には、4.2で述べたように「コミュニケーション言語活動」の達成について考えさせたり、内容に関する質問をしたりするなど全体への視点で評価するとともに、談話の構成や言語的側面（文法・語彙・音声など）、方略などパフォーマンスを支える個別の点について評価することも重視するという両面からの評価を促す必要がある。09冬短2クラスの評価シートに見るように、他者評価ではまず内容面について書かせ、自己評価では発表の質的な部分に焦点が行くような設計も考えられる。

(3) 発表後のディスカッション

発表直後のディスカッションは、内容面においても言語的な面においても即時のコメントを

整理し、評価の観点を確認する上でも重要である。特に非漢字圏の参加者は、コメントを日本語で記述する作業に慣れていない場合も多い。その際、発表後のディスカッションがあることで、自身の評価内容を日本語として表現するための準備ができ、それを評価シートの記述につなげることができる。

(4) 参照できる客観的な指標の利用

「総合日本語」の授業をデザインする場合、実際の研修参加者の持つ多様性を考慮して個別のクラスに合った内容を考える必要がある。その際、評価基準や評価シートのデザインに JF スタンドワードを利用したことは、評価が主観的になりすぎているかをチェックすることができるだけでなく、講師の判断が妥当かを確認し、授業活動を具体的に工夫でき、より創造的なクラス活動に踏み出すための土台ともなった。既存の指標にしばられるのではなく、それを参照することで、より自由なコースや評価のデザインが可能になっている。

課題としては、発表後のディスカッションの進め方、自己評価の実態の把握の2点があげられる。発表後のディスカッションが重要であることは上記(3)で述べた。しかし、発表後のディスカッションが授業の都合などで必ずしも十分に行えていないこと、ディスカッションのファシリテーションについて講師間で共有ができておらず、クラスや担当者によってばらばらであったことが課題として挙げられている。

2点目として、参加者が評価活動の中でどのように内省しているか、評価シートやディスカッションの質的な分析を行う必要がある点が挙げられる。さらに、評価の観点がどのように意識化されているのか、それが発表パフォーマンスの質の向上につながっているのかを検証していく必要がある。

6. まとめ

研修参加者は帰国後教師として教育現場に戻り、口頭による産出ややりとりの能力を評価する機会も少なくないため、「総合日本語」で「目標」「学習内容」「評価」に一貫性のあるコースを経験し、他者評価および自己評価を体験することで、コースデザインのあり方、多角的な視点で評価する方法について考える機会となると考える。評価者および評価対象者としての体験が、それぞれの状況での評価方法を考える上で参考となるだろう。

5の成果で述べたように、評価基準による自己評価・他者評価が研修参加者の自信と口頭発表の能力を伸ばしていくことにつながる可能性が看取された。研修参加者が帰国後も自己評価を行うことによって自分のパフォーマンスを客観的に振り返り自律的に学習を進めていくことが望まれるが、それが実現しているか今後検証していく必要がある。

さらに評価基準や評価シートを利用した口頭発表評価を通じて、「総合日本語」を担当する講師間のコミュニケーションの質が変わったと感じられる。「総合日本語」担当講師が共同で

評価基準と評価シートによる口頭発表の評価

評価基準や評価シートの作成等を検討する機会をたびたび持つ中で、お互いの教育観や疑問を話し、目標や評価の観点が教師間で共有された。そしてそのような経験を積み重ねることでコースや評価方法の検討と改善が継続されてきている。評価の導入は、研修参加者（学習者）にもたらされるものも多いが、コースの改善につながる情報や知見をもたらしてくれる。そして、最も有益な点は、評価を運用する講師（教師）にとって、自らの教育観を振り返ることができ、さらなる成長へのきっかけとなるということである。

〔注〕

- ^①NC では現職教師に対する研修を行っていることから、研修参加者と呼称する。
- ^②旧日本語能力試験（JLPT）の過去問および15分程度の口頭試験を行っている。
- ^③研修によって時間数が多少異なることがある。
- ^④JF 日本語教育スタンダードでは、CEFR Can-do の他に日本語使用の場面や言語行動を踏まえた JF Can-do も提供している。ここでは、その両者を参考としている。

〔参考文献〕

- 青木直子（2001）「教師の役割」『日本語教育学を学ぶ人のために』青木直子、尾崎明人、土岐哲編、第Ⅲ部第1章、182-197
- 岡部真理子（2001）“Self-assessment of oral communication in Japanese and the possibilities and limitations of incorporating self-assessment in language learning”『日本語教育論集』14、17-36、国立国語研究所日本語教育センター
- 金孝卿（2008）『第二言語としての日本語教室における「ピア内省」活動の研究』ひつじ書房
- 小山悟（1996）「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』88号、91-103
- 田中耕治（2008）『教育評価』岩波テキストボックス
- 古川嘉子・田中友愛・八田直美・三原龍志（2010）「JF 日本語教育スタンダードに基づく評価基準を利用した口頭能力の形成的評価」『2010年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、243-248
- 村田晶子（2004）「発表訓練における上級学習者の内省とピアフィードバックの分析—学習者同士のビデオ観察を通じて—」『日本語教育』120号、63-72

〔参考 URL〕

JF 日本語教育スタンダード 〈<http://jfstandard.jp>〉